

『軒先の記憶』

研究テーマ：個人商店におけるドキュメンタリー写真

写真領域専攻

日本で暮らすようになってから、私は街の中にある小さな個人商店に、自然と目が向くようになった。コンビニやスーパーが当たり前になった今でも、長い時間をかけてその場所に根を下ろし、変わらないやり方で続いてきた店がたくさんある。

けれど、そうした店は、気づかぬうちに少しづつ街から姿を消している。

豆腐店もその一つだ。

全国豆腐連合会の資料によると、個人経営の豆腐店は昭和35年（1960年）に全国で51,596軒と最も多かった。しかしその後は減り続け、平成26年（2014年）には8,017軒まで数を減らしている。東京都内に残っていたのは、わずか687軒だった。

それからさらに10年が過ぎ、私がGoogleマップで探せる豆腐店は200軒にも満たなくなった。今も、月単位で少しづつ閉じていく店がある。

建物や物は、いつか必ず姿を変えたり、消えてしまう。

それを寂しく思うのは、物そのものがなくなるからではなく、そこに自分が存在していた時に生まれた記憶が、失われていくように感じるからだと思う。

結局、人が本当に手放したくないのは、その場所で生まれた記憶なのだと感じている。

このテーマで私が撮ってきたのは、豆腐店という場所だけではない。

店主と話した時間、交わした視線、シャッターを切った瞬間の空気。

そうした一つ一つのやり取りが、写真の中に残っている。

だからこそ、写真は、本来なら時間の中で薄れていくはずのものを、ひとつの出会い、ひとつの視線、そして残することで、先へとつないでいく。

そこには、それぞれが持っていた記憶が重なり合い、同じ時間を分かち合っていくような感覚がある。

街を歩きながら、

「いつか入ってみよう」

「今度、買ってみよう」

そう思ったまま通り過ぎた店はないだろうか。

その「いつか」を、どうかそのままにしないでほしい。

その一歩が、あとから振り返る記憶になるかもしれない。

失われてから思い出すのではなく、今、触れられるうちに。

この作品は、そのきっかけになれば嬉しい。